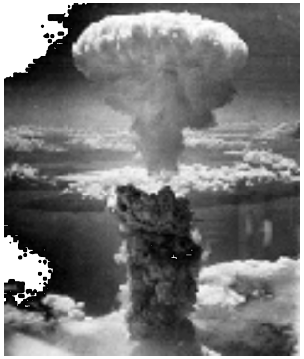
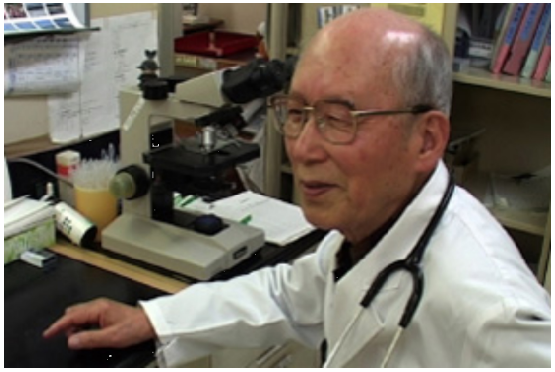
被爆者として、医師として、
被爆者の治療・救援や被爆者運動
医療の民主化に生涯を捧げた

肥田　舜太郎（ひだ　しゅんたろう）

・１９１７年（大正 6）1月1日　広島市段原町に生まれる
・１９４４年（昭和19）２８歳　日本大学専門部医学科を経て
陸軍軍医学校卒業 軍医少尉に任官
広島陸軍病院に赴任
・２０１７年（平成29）3月20日 さいたま市浦和区で歿　１００歳





● 被 爆

“ 見よ！広島に紅蓮の火柱が立つ ”
　かっとあたりが真っ白にくらんで，焔のあつさが顔と腕をふいた。（中略）その時、広島の街並みをさえぎる丘の連なりの上に、指輪を横たえたような真赤な大きな火の輪が浮んだ。と、その中心に突然、真白な雲の塊が出来た。それは瞬く間に大きくなり、火の輪を内側から押し上げてたちまちふくれ上って巨大な火の玉になり、同時に下は広島市を踏みしだく火柱となって立ちはだかった。その壮大にそびえ

立つ「きのこ雲」。（中略）
　「私の今、見ているものは何なのか」。２８歳の人生経験にない未知の世界がそこにある。私は知らず知らず大地にひざまずいていた。(後略)

　上記は、肥田さんが、広島市より６ｋｍはなれた戸坂（へさか）村で、急患の子供に注射をしようとして、注射薬のアンプルを切り始めた瞬間に被爆したときの、原子雲(きのこ雲)が立ち上る様を記録した自分史の一節である。
 肥田さん自身、負傷を負いながらも、借りた自転車で太田川ぞいに広島陸軍病院へと向う。途中で、市内から逃げてくる被爆者の群れに道をふさがれ、仕方なく自転車は捨てて川の中を広島へと急ぐ。
　陸軍病院は全滅。取って返して戸坂村へ。校庭の隅につくられた臨時の分院治療所で負傷者の治療に当たるも、無数に押し寄せる負傷者に３人の医師と看護婦だけでは限界があった。

　この時から、肥田さんは各医療施設で６千人もの被爆者の診療を行うことになる。その中で肥田さんが特に注目したのは、「原爆ぶらぶら病」とよばれる症状であった。臨床医学の見地から、内部被爆、微量放射線・低線量被爆によるものと判断し、その究明の必要性が急務であることを、１９７５年(昭和50)１１月、国連で訴え、「生存被爆者はすべて健康」とする１９６８年(昭和43)のウ・タント報告を根本から覆すことができ、大きな成果となった。

● 西荻窪診療所（杉並区西荻南4丁目２－７）

　戦後、飢餓生活が続くなかで、劣化した国民の健康状態を改善するため、いち早く立ち上ったのが民主診療所であった。西荻窪診療所もその一つである。
　１９５０年(昭和25)　４月２５日に開設され、診療を開始した。
　初代の所長になったのが肥田舜太郎さんである。肥田さんは広島で被爆後、柳井国立病院(山口県伊保庄村)で、被爆患者の診療に当った

開所当時の西荻診療所　後列左から３人目が肥田医師　（1950年）

のち上京し、国立医療労働組合をつくり、労働組合運動に専念した。それが原因で、１９４９年(昭和24年)占領軍総司令部のレッド・パージ(赤狩り)によって厚生省技官を馘首されていたところでの、打って付けの所長就任であった。

診療所は肥田医師と看護婦の2名で始まった。看板は肥田さんがベニヤ板に手書きした。初日の患者は5人、1ヶ月もすると毎日１５～６人、半年後には１００人をこえる日もあった。

３年後には、同じ系統の診療所が埼玉県行田市にもでき、そちらへ転勤するのであるが、在任中のエピソードは枚挙にいとまない。肥田さんの民主医療に対する情熱と、ひとをひきつける人柄が大きく貢献して、地域医療の存在価値を高めた功績は大きい。

● 被 爆 者 運 動

肥田さんは、現場の医師として活躍する一方、生涯被爆者の診療や相談活動を行ってきた。さらには、被爆者として原水爆禁止運動に参加。国内、国外に被爆の実相を普及するため、語り部活動や講演活動にも力を注いだ。

主な活動を列記すれば以下のとおりである

１９５５年　第１回原水爆禁止大会(広島)に参加
１９７５年　核兵器完全禁止を国連に要請する国民代表団に参加して渡米　以後、海外遊説はのべ３３カ国に及ぶ
１９７９年　日本被団協中央相談所理事長就任
１９８２年　「広島の消えた日」出版
１９８４年　反核平和講演を始め、この年だけで86回に及ぶ
１９８７年　中央相談所の「健康ハンドブック」第1号発行
２００４年　自分史「ヒロシマを生きのびて」出版
２００５年　「内部被爆の脅威」出版
　　同年８月２７日　杉並平和のための戦争原爆展で講演
２０１０年～執筆、翻訳、講演を続ける

かくして、肥田舜太郎さんは２０１７年(平成29)　３月２０日、数々の業績を残し、１００歳の天寿を全うして永眠した。

［文責、井上惣左衛門］

２００５年 「平和のための戦争原爆展 IN杉並」
（翌年から「杉並ピースフォーラム」）での講演記録

被爆者として医師として６０年

肥 田 舜 太 郎

日本原爆被害者中央相談所理事長
西 荻 診 療 所　 初 代 所 長

〔講演の要約〕

私は１９１７年の生まれ。１９４４年２８歳で広島に軍医として赴任し、被爆者になった。同時に医師として多くの死に立ち会い、６０００人の診療をしてきた。

一発の原爆は、一瞬にして２０数万人を死傷した。生き残った被爆者も、一人前の人とされなかった。被爆者は黙らされており、政府も７年間は何もしなかった。飢え死んでいく被爆者を助けられなかった。

原爆という特殊兵器は、爆心から５００ｍの広島陸軍病院にいた兵３００人、職員３００人を即死させた。生き残ったのは３人。

私は、６㎞はなれた戸坂（へさか）村の農家に、子どもの心臓発作の治療に行っていた。夜中であったのでそこに泊まらされた。翌朝、目覚めたのが８時。目の前に広島の空が広がっていた。B29が１機飛んでいた。前日までは、１０機・２０機来ても、他所への爆撃だったので平気だった。

私は、子どもに注射をしようとした瞬間、ピカッと光り、目がくらんだ。伏せようとしたら、焼けるような熱い風が来た。這って縁側へ出、広島の空を見た。

青空の下に、赤い火の輪ができ、そ

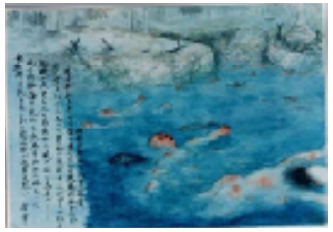
の輪の中から、火球と白い雲とが昇った。身体が震え、怖さで身動きができなかった。赤い輪は、小さな山をのりこえ、くずれながら太田川の谷に広がり、森と家を巻き込みながら押し寄せてくる。小学校の屋根瓦がめくれるのを見た。

次の瞬間、私は家の中を飛ばされていた。屋根が吹き飛ばされ、青空が見えた。家の瓦礫と泥に埋まり、その泥の中から子どもの手を引き出し、体に耳をあて心音を聞いた。

私は、自転車を借りて病院へ向かった。今は４車線の道路だが、当時は川の堤防に沿った道だった。３㎞進んだところで人が出てきた。びっくりした。全身真っ黒で、顔がない、目玉が２つ飛び出し、鼻はなく、腫れ上がった口と目だけが異常に目立つ。人間に見えない。ボロを着ているような姿で近づいてきた。飛びかかられたらと思うと怖かった。前のめりに倒れたので、脈を診ようとしたら、腕は黒い血の肉だった。ボロに見えたのは皮膚だった。背中にはガラスが沢山刺さっていた。

「もうちょっと行けば、家がある。がんばれ。」と言ったが、そこで痙攣して息絶えた。これが最初に出会った被爆者だった。

それから後は地獄の光景だった。歩いてくるおおぜいの被爆者。私は自転車を乗り捨てて、太田川の中を歩いていくことにした。火事の風が川水を巻き上げ、あたりは真っ暗だった。「こうへい橋」のあたりまで来たとき、風向きが変わり、霧が晴れたように明るくなった。



焼けた家の方から、熱さに耐えかねた裸の人が出てきて川に飛び込む。何も言わない、何も覚えていない人たちの姿。両手を前に上げて歩くたくさんの人々の姿。これは、大やけどをしたときの症状で、手を下におろすと鬱血して痛い。手先から皮膚が垂れ下がるので、上にあげるがくたびれて下がってくる。だからこのような手を前にした姿になるのだ。

川の中も、岸も、人の死骸でいっぱいになっ

た。これ以上は進めないので、手を合わせてから戸坂村へ戻った。

村の家々は点々とあるが、屋根がない。あぜ道に、家族が一列に並んで座っている。村の入口に人が倒れていた。小学校の校庭にも、役場の前にも、豆をまいたように人が倒れていた。役場の建物も屋根が無くなっていた。役人も巡査も頭をかかえて座っていた。何が起きたのか分からないのである。

何とか人々を助けなければならない。ここ、戸坂村に、医者・看護婦３人、村の医者と軍人とその奥さんの木陰に筵（むしろ）の救護所ができた。

患者は重症のやけどとけがだった。３分の１はすぐ死んでいった。なにしろ、爆風は風速２８０㍍。防火用水も吹き飛び、電柱も折れて吹き飛ぶ状況だから大けがとなる。私も「生死を見分けてこい。」と言われ治療にあたった。担架で運ばれてくる人の目を見ると、睨みつけるように助けを乞う。翌日から治療らしきことを始めたが、傷を縫うといっても、縫い針を焼いて、ヤットコで挟んで縫うという状態だった。

３日目の朝から異変が起きた。患者は、１万８千人～３万人。医師３人に看護婦で、１人で４千人を診ることになる。しかも、やけど・けがだけではない症状が出てきた。熱が出る。チフスではないかと怖かった。からだから湯気を出し、体温は４１度の体温計の限界を超える。目尻から、鼻から、口から出血をして死んでいく。ゴーッと吐血するので、私の膝から下は、血でビショビショになった。扁桃腺がやられ、口臭がひどく、そばに行っただけで臭いのだ。白血球が無くなって、細菌が口の中を腐らせる。さらに焼けていない白い肌に紫色の斑点（紫斑）が出るようになった。この症状はみんなに起こり、３人、５人と一緒に死んでいく。同じ時間、何時何分死亡となる。こんなこ

とは医者として経験したことがない。１週間目から、髪の毛が抜ける症状が出た。毛根が放射能にやられて抜けるのだ。

戸坂村の救護所に運ばれてきた人がこんなことを言った。

「自分は、ピカに合っていない。」あの日、昼過ぎに福山から救助に来た兵隊であった。下痢と嘔吐を繰り返し、動けなくなってここへ連れてこられたのだ。「自分にも紫斑が出た。何故だ。服も焼けていないのに」そして血を吐き、死んでいった。この、地べたに筵の病院は、伝染する病気の、物騒な病院と思われたのである。

院長が大阪から４日目に戻ってきた。

「病気は何だと思う？」病名が付けられないのだ。病名がわからないという医者はいないものだが、誰一人わからなかった。広島は牡蠣の産地で、生牡蠣のチフスには過敏だった。林の中の死骸の山から、遺体を選び、解剖をやるように言われた。バケツに水を入れて出かけた。脹れ上がった死体から腸を取り出して診た。チフスでも伝染病でもない。でも、何もわからなかった。

２週間目、筵敷き・まわりをよしずで囲んだ病室、屋根の無い土蔵の重傷病室の病院ができた。土蔵は涼しかった。しかし毎日、２人、３人と死んでいった。

日が経つと、大阪や東京や全国から人々が、人探しでやってくるようになった。村の入口までくると、村の人が「〇〇さん。〇〇さんが探しにきたよー。」と叫ぶ。患者が応える。

ある日、土蔵の病室にきれいな和服の女の人が寝かされていた。この人も誰かをを探しにきた人か。「和服の人が風邪をひいているから診てあげて。」と重症の兵隊に言われた。和服の人は、２４歳の奥さんで、３日目には真っ青になり、胸に紫斑ができていた。

去年７月に松江で結婚。１ヵ月前、松江に子どもを産みに戻り、爆後１週間目に、広島県庁勤めの旦那を探しに、山陽線の土手を海に向かって歩き広島に帰ってきたのだ。１週間探しまわり、そしてこの土蔵の中で旦那と再会したのだった。

旦那は、広島でちょうど地下室にいたとき被爆、大腿骨の骨折だっ

た。奥さんに会えてうれしい旦那だったが「おまえは、松江にいたのに・・・」
髪の毛が抜けて死んでいく奥さんの名前を呼んで泣いた。この時は、まわりのみんなも泣いた。

岐阜の連隊に召集された頃
２５歳の肥田氏（１９４２年）

原因は原子爆弾とはわかったが、放射能のことはわからなかった。１２月、山口県柳井市の古兵舎を「国立病院」として開いた。板の上に毛布という病院だった。木を燃やして暖をとり、食べ物はあったが衰弱ははげしかった。結核や赤痢とちがい、原爆病は日本の法律にない病気だった。厚生省からは被爆者はカルテをつくるなと指導された。アメリカが禁止したのだ。カルテは別の紙に記録として残した。

マッカーサー命令の「国立病院をつくれ！」「組合をつくれ！」で陸軍病院が国立病院になった。院長の命令で病院にも組合ができた。そして私も執行委員になり東京に出されることになったのである。

被爆３０年目、原水禁・被団協ができた。
アメリカは広島で研究を行い、昭和４３年、国連で「広島に原爆の病人はもう一人もいないはず」と表明した。しかし、１９７７年の国際会議で原爆症患者はいっぱいいると確認された。

現在、世界には、原子爆弾でない被爆者が２０万人。ウラン鉱山・ウラン工場・水爆実験場の原住民などなど。

・アメリカの被爆者は、アメリカ政府の方針に反する者とされている。
・アメリカは核をやめるだろうか。国がつぶれても核はやめないだろう。
・アメリカの国民の闘いがいま必要になっている。
・アメリカは日本を頼りにしている。
「日本も血を流せ」にこたえ、政府は憲法の改悪を叫んでいる。

＊憲法を守り、人権を守るために、不当な動きには勇気を持ってノーと言おう。
＊これからは、国民一人一人ができることから運動を進めよう。
＊戦争だけは反対！を隣近所、身のまわりにつくろう。
＊「９条を変えるな」と素人がスクラムを組もう。

８８歳、私もがんばる。
（被爆・戦後６０年　２００５年８月２７日（土）杉並戦争原爆展で）

記録：編集　髙木　堆芳　（たかぎ たかし）

戸坂村原爆供養塔

戸坂地区は爆心地から比較的離れているため、原爆による大きな被害はなかった。被爆後、市内中心部から避難してきた多くの被災者の救護に村民を始め、戸坂国民学校（現在の戸坂小学校）に所在していた陸軍病院戸坂分院の軍医などが当たった。地区内で死亡した約600人は、村民などにより荼毘に付された。1945年10月、遺骨が長尾山に仮埋葬され、そこへ標識として供養塔が建てられた。1959年4月、遺骨は平和記念公園内の原爆供養塔に納められた。1995年4月、供養塔が現在地に移設された。

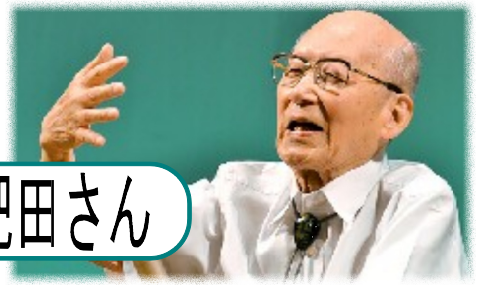
橋を渡り　川を泳ぎ
たどりついた陸軍病院分院近く
名を告げる力さえなく
目を閉じた人たち
騎兵隊の門柱の碑
六百人とも

数知れず伊藤眞理子：＜詩集：あした きらきら＞より

・現在の地図の上で爆心地から戸坂村までの位置関係を示しました。
・円は爆心地から１キロの同心円となっています。
・戸坂駅などは爆心地からちょうど６キロになります。

一面の原子野　広島から戸坂方向（丘の向こう）

２０１１年
埼玉での
シンポジウムで話す肥田さん



◇１９４５年に原爆が落とされてから、数千回もの核実験が世界で繰り返されてきました。そして、何千発もの核弾頭が、いつ爆発するか分からずに眠っています。何百という原子力発電所が稼動し、放射能を含んだゴミが、毎日、生まれています。
（『核の傷』ナレーションより）

◇私は２８歳の時に、広島の陸軍病院の軍医に召集されました。当時、日本中の都市が米軍の飛行機に爆弾を落とされていたのに、広島だけは毎日のように敵の飛行機が空中を巡りながら、１回も空襲がなかった。日に何度も警報が鳴るのに、爆弾は落ちてこなかったんです。広島の人たちはのんきなのか、「広島には宮島の神様がついているから安全じゃ」なんて言っていたのですが、今考えると、アメリカは原爆を落とす場所として広島を残しておいたんですね。そしてあの日、原爆が落とされた。

◇「本当に怖いのは、内部被曝。長い時間かけて命を奪うのです。」原爆投下直後から現在まで、被爆者に寄り添いながら治療にあたってきた肥田さん。その臨床経験から、原爆の本質的な脅威とは、広範囲に降り注いだ残留放射線が人体に入り込んで、長年にわたって遺伝子を傷つけ続ける「内部被曝」にこそあると訴え続けてきました。

◇私は、被爆したという事実を乗り越えて、８０、９０、１００まで生きると言う方針を自分で掲げた。そして、被爆者たちにも、「１００まで生きる生き方」を教えてきました。
人間は、ただ自然に任せて生きていたらだめです。「俺は生きるんだ」と強い意思をもって生きてください。そして、昔から伝わっている正しい生き方をする。それ以外に方法はありません。

（９０歳を超えて・・・）